

ふるさと見て歩き

第37回

八田雷神山横穴墓群



▲八田雷神山横穴墓群

横穴墓は古墳時代の後期五世紀頃に九州に伝わり、奈良時代のはじめ七世紀前後には東北地方にまで広まったと考えられています。台地や丘陵の崖面に横方向に穴を掘り込んで墓室としたものです。

横穴墓の構造は、遺体を安置する部屋である「玄室」、外界から玄室までを結ぶ通路である「羨道」、その入口にあたる「羨門」、そして外側に広がる「前庭部」となっています。穴の形はアーチ型、ドーム型がほとんどですが、家型のものもみられます。

JR水郡線上り列車で玉川村駅を発車すると間もなく左側に雑木山が迫ってきます。雷神山はそのうちのひとつで、木の繁らない時期ならば、山の斜面にぽっかりと空いた横穴を車窓から見ることもできます。洞窟のようなこの穴、いったい何なのでしょう。

◇横穴墓とは

古墳時代初めの四世紀頃から西日本を中心に巨大な古墳が築造され、各地に前方後円墳や前方後方墳が現れます。後半期になると古墳の規模は縮小し、小さな円墳などが密集して作られる群集墳が現れるようになります。

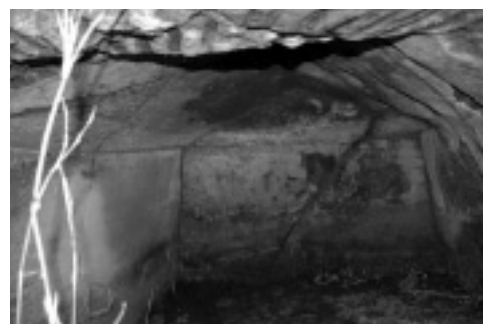
数十から数百までとまって発見される事も少なくありません。埼玉県の吉見百穴は二百二十七基の横穴墓を持ち、明治初期から研究者の間で住居か墓穴かの議論が行われてきました。県内では県北部の太平洋沿岸地域と霞ヶ浦周辺に横穴墓が多くみられます。ひたちなか市中根の十五郎穴横穴墓(県指定史跡)では総数約三百基(うち史跡指定二十四基、常陸太田市の幡横穴墓群(市指定史跡)では約百六十基と大規模な横穴墓群が確認されています。

◇雷神山横穴墓群と岩欠横穴墓群

市内には八田に雷神山横穴墓群、岩欠横穴墓群があります。雷神山横穴墓は凝灰岩の崖の中腹に五基の横穴墓があり、一基は床面以外を球状に掘り込んだドーム型で、四基はトンネル状にアーチ型に掘り込んでいます。このうちドーム型の一基は最も高い場所に位置しています。形状的にも天井と壁面が丁寧に球状に削られ、天井までの高さも百五十五センチメートル以上ある立派なものです。他の横穴墓とは格差があり、被葬者の地位の違いを表しているのかもしれない。内部には掘り込んだ際の道具の跡が残っており造営の様子をうかがい知ることが出来ます。



▲十五郎穴横穴墓群



▲岩欠横穴墓群1号基内部

ように見える浅い穴や中に土砂が溜まってほとんど空間がなくなっているものも三、四基ほど確認できます。横穴墓と確認できる五基のうち一基は五角形に掘り込んだ家型、他はアーチ型となっています。築造の時期は八世紀から九世紀と考えられています。いずれも発掘調査は行われていないため人骨や副葬品等は発見されておらず、被葬者についても不明です。またこれらは山の崖面の中腹にあるため土砂や木の葉などで埋まっている部分が多く、今後の調査で更に横穴が発見される可能性もあります。

※「横穴」は「よこあな」のほかに「おうけつ」と読む場合もあり、研究者の間でも意見が分かれています。

歴史民俗資料館

52 | 1450